

|             |   |
|-------------|---|
| Title       | 非I型の群のユニタリー表現について (同型写像と非有界微分子)   |
| Author(s)   | 船越, 俊介  |
| Citation    | 数理解析研究所講究録 (1978), 320: 62-72   |
| Issue Date  | 1978-03   |
| URL         | <a href="http://hdl.handle.net/2433/104003">http://hdl.handle.net/2433/104003</a> |
| Right       |   |
| Type        | Departmental Bulletin Paper   |
| Textversion | publisher   |

## 非 I 型の群のユニタリ-表現について

神戸大 教育 船越俊介

§1. ここで、我々は非 I 型の局所コンパクト群の表現論に関するいくつかのことを、作用素環論との関連において、報告する。ここにいう「作用素環論との関連」とは、次のように局所コンパクト群と Von Neumann 環,  $C^*$ -環 を “表現と媒介にして” 関連していることを意味する:

- $G$  と可分局所コンパクト群,  $\pi$  と  $G$  のヒルベルト空間  $\mathcal{H}$  上へのユニタリ-表現とする。そして,  $\pi(g), g \in G$  で生成される Von Neumann 環  $M_\pi = \{\pi(g) | g \in G\}''$  を考える。このとき, 表現  $\pi$  のある種の特徴——群  $G$  のある種の構造——が Von Neumann 環  $M_\pi$  の構造に反映される。  $M_\pi$  が因子であるとき,  $\pi$  を因子表現という。  $\pi$  の  $\text{type}(\text{型})$  は  $M_\pi$  の Von Neumann 環としての  $\text{type}$  と定義する。そして,  $G$  が I 型の群であるとは  $G$  のすべての表現が I 型であることと定義する。

- $G$  の表現は  $C^*$ -環  $C^*(G)$  の表現と対応している。  $G$  が非 I 型の群であることと  $C^*(G)$  が NGCR  $C^*$ -環であることは

同値である。

## §2. 非 I 型の群の具体例.

(連結な) semi-simple リー群, nilpotent リー群は I 型の群であることが知られている. また, solvable リー群が非 I 型の群であるための判定条件がいくつか知られている ([1], [2], [3]). ほとんどのディスクリート群は非 I 型の群である.

具体的な非 I 型の群の例を挙げる ([2] を参照):

- $\mathbb{R} \ltimes \mathbb{C}^2$  (Mautner group),  $\mathbb{R} \ltimes \mathbb{C}^2$  の半直積群.
- $\mathbb{R}^3 \ltimes \mathbb{C}^4$  (Extended Mautner group の例).
- $\mathbb{R}^2 \ltimes \mathbb{R}^6$  (Semi-simply regular, but not unipotently regular).
- $(\mathbb{R} \ltimes \mathbb{C}^2) \ltimes \mathbb{R}$  (with a type I regular representation).
- J. Dixmier constructed a connected solvable Lie group of type I such that its universal covering group is not of type I.

この報告においては, Mautner 群の表現論を中心にする.

そこで詳しく Mautner 群の定義をとえる:  $\mathbb{R} \ltimes \mathbb{C}^2$  の半直積群  $\mathbb{R} \ltimes \mathbb{C}^2$  である. 群演算は,  $(t; z_1, z_2), (t'; z'_1, z'_2) \in \mathbb{R} \ltimes \mathbb{C}^2$ ,

$$(t; z_1, z_2) \cdot (t'; z'_1, z'_2) = (t+t'; z_1 + e^{it} z'_1, z_2 + e^{it} z'_2),$$

$t$  は一つの無理数, で与えられる. 要素の行列表示は

$$\begin{pmatrix} e^{it} & 0 & z \\ 0 & e^{i\omega t} & w \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}, t \in \mathbb{R}, z, w \in \mathbb{C}$$

である.  $\mathbb{R}$  の  $\mathbb{C}^2$  上への作用  $V_t$  は  $V_t(z_1, z_2) = (e^{it}z_1, e^{i\alpha t}z_2)$  である. 従って, カ字系  $(\mathbb{C}^2, \mathbb{R}, V)$  を考えらる. このカ字系は同族系の微分方程式

$$\frac{dx_1}{dt} = -x_2, \quad \frac{dx_2}{dt} = x_1, \quad \frac{dx_3}{dt} = -\alpha x_4, \quad \frac{dx_4}{dt} = \alpha x_3$$

から導かれる.

§3. 群及び  $C^*$ -環の表現論の基本的課題は

- ・ (既約, 因子) 表現の構成,
- ・ 任意の表現の (既約, 因子表現への) 分解

の二つである.

群の表現の構成法としては「誘導表現」 「Inducibility theory」等, 分解の方法としては「直積分 (連続和)」による方法が知られているが, 非 I 型の群の場合は, I 型の群に比べて, 構成も分解も困難である —— うまくゆかない.

以下において, Mautner 群を主な対象として, 次のことを解説する:

◎ 一般に, 「可分局所」コンパクト群が非 I 型であれば, II 型及び III 型の表現を持つ」ことが知られている ([4]). 次の §4 で, Mautner 群の II 型, III 型の因子表現と具体的に構成する.

◎ 非 I 型の群の表現の既約表現への分解は一意的でない

ことが知られている。・非I型の群の表現の既約表現への分解に関連して次の定理が知られている；

$\exists \pi^i$ : representation of type  $i$  ( $i=II, III$ ) s.t.

$$\pi = \int_P \pi_r^II d\mu^II(r), \quad \pi = \int_P \pi_r^III d\mu^III(r) \quad (\text{既約分解}),$$

$$\text{where, } \pi_r^II \cong \pi_r^III \quad (\forall r \in P).$$

前者に関して, §5で Mautner 群の正則表現の二通りの既約分解を A.A. Kirillov [5] に従って概説する。

後者に関して, §6で Mautner 群に対して, 具体的に  $\pi^i$ ,  $\pi_r^i$  ( $i=II, III$ ) を構成する。

#### §4. Mautner 群の II 型, III 型の因子表現の構成.

(1). 道具として「力学系の理論」を用いる。ここで,  
 $(G, S, \mu)$  が力学系であるとは,  $G, S$  は共に可分な局所コンパクト空間, 完備距離付け可能な空間, さらに  $G$  は位相群,  $S$  は測度空間, そして  $(G, S)$  は位相変換群で,  $S$  上の測度(measure)  $\mu$  は  $G$  の作用のもとで quasi-invariant な正のラビノフ測度とする。

$(G, S, \mu)$  が ① free とは,  $\forall g \in G (g \neq e), \mu(\{x \in S | x = xg\}) = 0$ . ② ergodic とは,  $S$  の Borel set  $P$  に対して  $Pg = P$  (for all  $g \in G$ ) ならば,  $\mu(P) = 0$  か  $\mu(S \setminus P) = 0$  かのいずれかである。③ measurable とは,  $\nu \sim \mu$  (同値),  $d\nu(xg) = \Delta(g) d\nu(g)$  ( $g \in G, \Delta(g)$  は

modular function) なる  $\sigma$ -finite な positive measure  $\nu$  が存在する。④ measurable でないとき, non-measurable という。

(2).  $(G, S, \mu)$  に対して, 次のような Von Neumann 環  $\mathcal{R}(G, S, \mu)$  と作る:

- $g \mapsto (T_g f)(s) = f(sg) \left( \frac{d\nu_g}{d\mu}(s) \right)^{1/2}$ ,  $f \in L^2(S, d\mu)$ ,
- $\varphi \in L^\infty(S, \mu)$ ,  $M_\varphi$ : multiplication by  $\varphi$  on  $L^2(S, \mu)$ ,
- $R(g)$ : the right regular representation of  $G$ ,
- $\mathcal{H} = L^2(G, ds) \otimes L^2(S, \mu)$ ,  $ds$ : right invariant Haar measure,
- $\mathcal{R}(G, S, \mu)$ : the Von Neumann algebra on  $\mathcal{H}$  generated by  $R(g) \otimes T_g$  and  $I \otimes M_\varphi$  ( $g \in G, \varphi \in L^\infty(S, \mu)$ ).

このとき,  $(G, S, \mu)$  の性質と  $\mathcal{R}(G, S, \mu)$  の構造との間に次の関係がある:

- $(G, S, \mu)$  が free, ergodic ならば  $\mathcal{R}(G, S, \mu)$  は因子,
- $(G, S, \mu)$  が free, ergodic かつ measurable ならば  $\mathcal{R}(G, S, \mu)$  は  $I_\infty$  型 または  $II_\infty$  型の因子,
- $(G, S, \mu)$  が free, ergodic かつ non-measurable ならば  $\mathcal{R}(G, S, \mu)$  は  $III$  型の因子.

(3). Non-measurable 力学系の一つの構成法:

$(G, S)$  を位相変換群 ( $G, S$  は (1) の仮定を満たすものとする) とし, 次の仮定とする;

- ① Orbit space  $S/G = \{Gs \mid s \in S\}$  が位相空間として  $T_0$ -空間

でない。

②  $G$  は可換群である。

③  $G$  は  $S$  に effective に作用する。

いま,  $\pi$  を  $S$  から  $S/G$  への標準写像とし,  $S/G$  の任意の一点  $p$  を固定して,  $X \equiv \pi^{-1}(\{p\})$  とおけば, 位相変換群  $(G, X)$  が得られる。

このとき,  $(G, X, \beta)$  が free, ergodicかつ non-measurable な力学系となるような  $X$  上の測度  $\beta$  が構成できる。  $\beta$  の作り方の大筋を記す:

- $\forall n, M_n = \{0, 1\}, 0+0=1+1=0, 0+1=1+0=1$ ; 加法群
- $\mu_n(\{0\}) = p, \mu_n(\{1\}) = q, p=1-q, 0 < p, q < 1, p \neq 1/2$ .
- $M = \prod_{n=1}^{\infty} M_n, \mu = \prod_{n=1}^{\infty} \mu_n$
- $\mathcal{G}$ : the set of those  $a = (a_n | n=1, 2, \dots)$  in  $M$  for which  $a_n \neq 0$  occurs for a finite number of  $n$  only; 加算群

このとき,  $(\mathcal{G}, M, \mu)$  は free, ergodicかつ non-measurable な力学系である。  $M$  から  $X$  の中への位相同型が存在する。  $M$  を  $X$  の部分集合とみなす。  $\{i_1\} \times \{i_2\} \times \dots \times \{i_n\} \times \{0, 1\} \times \{0, 1\} \times \dots$ ,  $i_j$  は 0 または 1, が基底となる。

まず,  $X$  上の測度  $\lambda$  を定義する:

$$\begin{cases} \lambda(\{i_1\} \times \{i_2\} \times \dots \times \{i_n\} \times \{0, 1\} \times \{0, 1\} \times \dots) = p^n q^{n-r} \\ \lambda(X \setminus M) = 0, \end{cases}$$

ここで、 $r$  は  $i_1, i_2, \dots, i_n$  の中で 0 の個数、したがって、 $(n-r)$  は 1 の個数。

次に、 $\nu$  と  $G$  上の、right invariant Haar measure と同値な、有限測度とし、 $X$  の任意の Borel subset  $B$  に対して

$$\nu * \lambda(B) = \int_G \lambda(hB) d\nu(h)$$

と定義すれば、

$$\beta = \nu * \lambda$$

が与える測度である。

(4). Mautner 群の  $II_\infty$  型及び III 型の因子表現の構成:

(3) での一般の場合の  $G$  として  $\mathbb{R}$ ,  $S$  として  $\mathbb{C}^2$ ,  $\mathbb{R}$  の  $\mathbb{C}^2$  への作用は  $T_t(z_1, z_2) = (e^{it}z_1, e^{it}z_2)$ , したがって  $X = \mathbb{T}^2$  (2次元トーラス) と考える。すると、 $\mathbb{T}^2$  上の測度  $\beta$  が存在して  $(\mathbb{R}, \mathbb{T}^2, \beta)$  は free, ergodicかつ non-measurable な力学系となり、von Neumann 環  $\mathcal{R}(\mathbb{R}, \mathbb{T}^2, \beta)$  は III 型の因子である。

一方、Mautner 群  $\mathbb{R} \times \mathbb{C}^2$  の  $L^2(\mathbb{T}^2 \times \mathbb{R}, \beta \times \nu)$ ,  $\nu$  は  $\mathbb{R}$  上の Lebesgue 測度、上へのユニタリ表現  $\pi$  を次のように定義する:

$$\begin{aligned} \mathbb{R} \times \mathbb{C}^2(t; z_1, z_2) &\longrightarrow \pi_{(t, z_1, z_2)} f(z_1, z_2, p) \\ &= \exp(i \operatorname{Re}(z_1 \bar{z}_2 z_2)) f(e^{it} z_1, e^{it} z_2, t+p) \\ &\quad (f \in L^2(\mathbb{T}^2 \times \mathbb{R}, \beta \times \nu)). \end{aligned}$$

すると、 $\mathcal{R}(\mathbb{R}, \mathbb{T}^2, \beta) \subset \pi \pi_g \pi_g^* \pi$  は同型である。従



って,  $\Pi$  が II 型の因子表現である.

上述の表現の構成において,  $\mathbb{T}^2$  上の測度  $\beta$  の代りに, 通常の Lebesgue 測度を用いれば,  $\text{II}_\infty$  型の因子表現が得られる.

### §5. Mautner 群の正則表現の二通りの既約分解.

$G = \mathbb{R} \times \mathbb{C}^2$  を Mautner 群,  $G$  の要素を  $g = (t; z, w)$ ,  $z = x + iy$ ,  $w = u + iv$  と書く.  $dg = dt dx dy du dv$  を  $G$  の両側不変 Haar 測度とする.

$T$  を  $G$  の右正則表現とする. すなわち  $f \in L^2(G, dg)$ ,

$$\begin{aligned} (T_{(z; \bar{z}, w)} f)(t; z, w) \\ = f(t+z; z + e^{it}\bar{z}, w + e^{it}w). \end{aligned}$$

$T$  の二通りの既約分解 (既約成分が同値でない) を与える:

[First Method]

$f(t; z, w) \in L^2(G, dg)$  の  $(z, w)$  に関する Fourier 変換をする

$$; \quad \tilde{f}(t; a, b) = \iiint f(t; z, w) e^{i\operatorname{Re}(a\bar{z} + b\bar{w})} dx dy du dv.$$

この Fourier 変換によつて,  $T$  は  $T_1$  になる;

$$\begin{aligned} (T_1(z; \bar{z}, w) \tilde{f})(t; a, b) \\ = e^{i\operatorname{Re}(e^{it}a\bar{z} + e^{it}b\bar{w})} \tilde{f}(t+z; a, b). \end{aligned}$$

$T_1$  は, 既約表現  $U_{(a, b)}$ ,  $(a, b) \in \mathbb{C}^2$ ,

$$(U_{(a, b)}(z; \bar{z}, w) \phi)(t) = e^{i\operatorname{Re}(e^{it}a\bar{z} + e^{it}b\bar{w})} \phi(t+z)$$

, acting in  $L^2(\mathbb{R}, dt)$ , の連続和である。

[Second Method]

まず,  $f(t; z, \omega) \in L^2(\mathbb{C}, d\bar{z})$  の変数変換

$$f(t; z, \omega) = \phi(t; e^{-it}z, e^{-i\omega}\bar{\omega})$$

をたえる。そして,  $\phi$  の  $(t, z, \omega)$  に関する Fourier 変換とする:

$$\tilde{\phi}(s; a, b) = \iiint \phi(t; z, \omega) e^{i\operatorname{Re}(ts + a\bar{z} + b\bar{\omega})} dt dx dy du dv.$$

この Fourier 変換によつて,  $T$  は  $T_2$  になる;

$$\begin{aligned} (T_2(z; \cdot, \cdot) \tilde{\phi})(s; a, b) \\ = e^{i\operatorname{Re}(zs + e^{iz}a\bar{z} + e^{i\omega}b\bar{\omega})} \tilde{\phi}(s; e^{iz}a, e^{i\omega}b) \dots (6). \end{aligned}$$

ここで,  $X_{r,s}$  と,  $r, s$  と非負の実数とし,  $|a|=r$ ,  $|b|=s$  とおき,  $\mathbb{C}^2$  の 2次元 surface とする。

$T_2$  は, 既約表現  $V_{r,s,s}$ ,

$$\begin{aligned} (V_{r,s,s}(z; \cdot, \cdot) \phi)(a, b) \\ = e^{i\operatorname{Re}(zs + e^{iz}a\bar{z} + e^{i\omega}b\bar{\omega})} \phi(e^{iz}a, e^{i\omega}b) \end{aligned}$$

, acting in  $L^2(X_{r,s})$ , の連続和である。

$\Gamma \vee(a, b), \vee(r, s, s); U_{(a,b)} \neq V_{r,s,s}$

従つて, 正則表現の異なる二通りの既約分解が出来る。

§6.

$G = \mathbb{R} \times \mathbb{C}^2$  とし,  $\mu^{\text{II}}, \mu^{\text{III}}$  を  $\mathbb{T}^2$  上の測度で, 力学系

$(\mathbb{R}, \mathbb{T}^2, \mu^{\text{II}})$  が free, ergodic かつ measurable,

$(\mathbb{R}, \mathbb{T}^2, \mu^{\text{III}})$  が free, ergodic かつ non-measurable,

となるようなものとする (§4 参照).  $\nu$  は  $\mathbb{R}$  上の Lebesgue 測度とする. このとき, §4 の結果より

$$\textcircled{1} (t; z_1, z_2) \longmapsto \pi_{(t; z_1, z_2)}^{\text{II}} f((a, b), p) \\ = e^{(-i(\operatorname{Re}(e^{-it} a z_1 + e^{-i\omega t} b z_2)))} f((a, b), p-t)$$

を  $G$  の  $L^2(\mathbb{T}^2 \times \mathbb{R}, \mu^{\text{II}} \times \nu)$  への因子表現とする.

$\pi^{\text{II}}$  は  $\text{II}_\infty$  型の因子表現である.

$$\textcircled{2} (t; z_1, z_2) \longmapsto \pi_{(t; z_1, z_2)}^{\text{III}} f((a, b), p)$$

を  $G$  の  $L^2(\mathbb{T}^2 \times \mathbb{R}, \mu^{\text{III}} \times \nu)$  への因子表現とする.

$\pi^{\text{III}}$  は  $\text{III}$  型の因子表現である.

次に,  $(a, b) \in \mathbb{T}^2$  に対し

$$(t; z_1, z_2) \longmapsto U_{(t; z_1, z_2)}^{(a, b)} \phi(p) \\ = e^{(-i(\operatorname{Re}(e^{-it} a z_1 + e^{-i\omega t} b z_2)))} \phi(p-t)$$

なる  $G$  の  $L^2(\mathbb{R}, \nu)$  への表現を定義する.

このとき, 次の結果を得る:

①  $\forall (a, b) \neq (0, 0) \in \mathbb{T}^2$ ,  $U^{(a, b)}$  は既約表現である.

②  $U^{(a, b)} \cong U^{(a', b')}$  であるための必要十分条件は  $t_0 \in \mathbb{R}$  が存在して,  $a' = e^{-it_0} a$ ,  $b' = e^{-i\omega t_0} b$  となることである.

③  $\pi^{\text{II}}$  は, 測度  $\mu^{\text{II}}$  に関して,  $U^{(a, b)}$ ,  $(a, b) \in \mathbb{T}^2$  の連続和で

ある。すなわち,  $\pi^{\text{II}} = \int_{\mathbb{T}^2} J^{(a,b)} d\mu^{\text{II}}(a,b)$ .  
 $\pi^{\text{III}}$  は, 測度  $\mu^{\text{III}}$  に関して,  $J^{(a,b)}$ ,  $(a,b) \in \mathbb{T}^2$  の連続核である。  
 すなわち,  $\pi^{\text{III}} = \int_{\mathbb{T}^2} J^{(a,b)} d\mu^{\text{III}}(a,b)$ .

### References

- [1] L.Auslander and Kostant; Polarization and unitary representations of solvable Lie groups. Inventiones Math, 14(1971), 255 - 354.
- [2] L.Auslander and C.C.Moore; Unitary Representations of Solvable Lie Groups. Memoirs of the A.M.S.62(1966).
- [3] S.Funakosi; On Representations of Topological \*-Algebras and  $\mathcal{O}$ -Compact Lie Groups. Math.Japonicae, 21(1976), 1 - 17.
- [4] J.Glimm; Type I C\*-algebras. Ann of Math, (2) 73(1961), 572 - 612.
- [5] A.A.Kirillov; Elements of the Theory of Representations. Springer - Verlag, (1976).
- [6] M.Takesaki; On some representations of C\*-algebras. Tôhoku Math Journ, 15(1963), 79 - 95.